

令和 6 年 10 月 1 日現在

機関番号：32689
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2018～2023
課題番号：17KK0033
研究課題名（和文）イギリス帝国による世界的な文書隠蔽工作：1950-80年代における植民地省の役割

研究課題名（英文）Britain's Global Destruction of Inconvenient Records: The Role of the Colonial Office

研究代表者
佐藤 尚平（Sato, Shohei）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70597939
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,300,000円
渡航期間： 5ヶ月

研究成果の概要（和文）：最盛期には地球の陸地の4分の1を影響下におさめていたとも言われるイギリス帝国であったが、第二次世界大戦後に急速に衰退し、世界各地からの撤退を余儀なくされた。この時期に、世界各地で何らかの文書が処分されたのではないかとということが長年疑われていたが、詳細は謎のまま。こうした中、イギリス帝国が隠蔽したはずの植民地文書が、実は、ロンドンの近くに保管されていたことが近年判明した。本研究は、この新出史料を読み解きながら、本国イギリスの植民地省の役割に焦点を当てて、イギリス帝国による世界的な文書隠蔽工作の様子を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、実証的かつ地域横断的に、歴史認識や集合的記憶について本格的に検討しようという大きな潮流に貢献する。まず、当時のイギリス帝国全体に広がっていた心性を浮き彫りにする。それは、本国イギリスの植民地省のエリートだけでなく、各帝国に派遣されていた植民地官僚、また時には現地側の協力者にも脱中心的に共有されていた歴史認識、罪の意識、未来に向けた共通認識である。こうした分析は、他の近代帝国や諸国家による類似の事例との比較に発展する。さらに、こうした研究潮流は、集合的記憶と、その裏側にある集合的忘却をめぐる社会的な関心に対して、実証的な知見を提示するものである。

研究成果の概要（英文）：Many empires, countries, and societies are suspected to have destroyed or hidden inconvenient records in one way or another. Unfortunately, these acts of obfuscation, by nature, tend to leave few traces, resulting in our poor understanding of the universal phenomena. However, recently discovered and declassified files reveal in unusual detail the way in which the British Empire concealed and destroyed sensitive documents in the mid- to late twentieth century across its colonies worldwide. Focusing on the role of the Colonial Office in London, this research project examined how and to what extent Britain attempted to tailor the historical understanding of its past at the critical juncture of imperial retreat. Reconstructing, in unusual detail, the act of imperial obfuscation, this project is hoped to open a debate that is relevant to an understanding of many empires and societies across the globe.

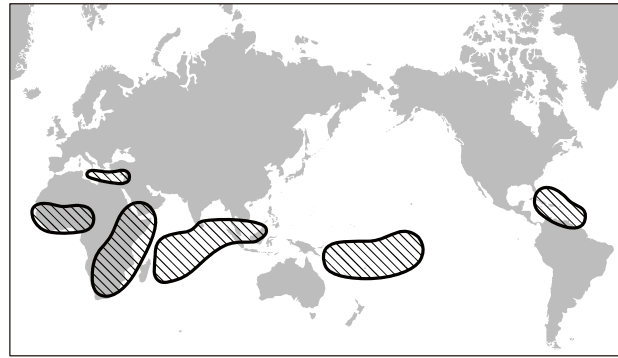
研究分野：イギリス帝国史

キーワード：集合的記憶 集合的忘却 文書管理 隠蔽工作 歴史認識 植民地独立

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後、ヨーロッパや日本の諸帝国は、世界各地の植民地から撤退した。特にイギリス帝国は、最盛期には地球の陸地の 4 分の 1 を影響下におさめていたとも言われる大帝国有り、イギリス帝国の解体と植民地独立は世界史的な転換点だった。この時期に、イギリスが世界各地で何らかの文書を処分したのではないかとということが長年疑われていたが、その詳細は謎に包まれてきた。こうした中、イギリス帝国が隠蔽したはずの植民地文書が、実は、ロンドンの近くに保管されていたことが近年判明した。

これは、イギリスが世界の 37 の植民地（地図の編みかけ）で隠匿し、秘密裡にイギリスに移送した約 2 万ファイルの新出史料「移送文書群」である。



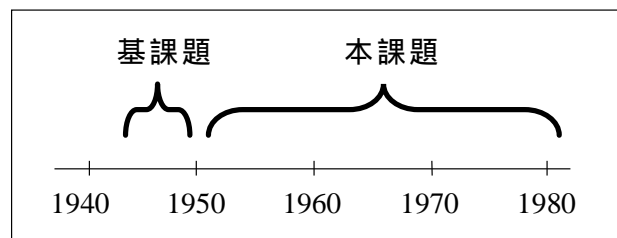
移送文書群の存在が明らかになって以来、多くの研究者やジャーナリストは、これを政治スキャンダルとして批判してきた。

一般の秘密文書の場合、政府はその存在については一旦認めた上で、その内容を非公開にするという手続きを取る。しかし移送文書群の場合、イギリス政府はその存在すら長年否定してきた。これは民主主義に対する裏切りだ、というのである。こうした視点からは、どちらかと言えば現代の政治問題としてこの話が注目される傾向にある。しかしもう一つ忘れてはならないことがある。それは、植民地独立という歴史的な転換点において、世界規模な文書隠蔽が行われたという事実そのものである。かつては世界を席卷した帝国の解体という一大事の中、貴重な人員と時間を割いてまで、イギリス帝国は何を必死に隠そうとしたのか。現代社会の起点となるこの時期に、世界は何を忘れてきたのか。イギリス一国を超えて、世界の近現代史理解にかかわる根源的な問題として、この文書隠蔽工作に光を当てたい。この願いから、本研究は構想された。

2. 研究の目的

研究代表者の長期的な目標は、第二次世界大戦後のイギリス帝国による世界的な文書隠蔽工作の全容に光を当てることである。この大目標を達成するための段階の一つとして、本課題は計画された。

文書隠蔽工作は、1940 年代にはじまり、少なくとも 20 世紀後半まで続く。この初期段階、1940 年代を中心に検討したのが、本課題の前提となった基課題である。それを受けて本課題では、1950 年代以降の中後期に分析の軸足を移した。



ここで重視したのは、イギリスの植民地省の役割である。というのも、ここが基課題を通じて輪郭をあらわした死角、言わば分析のブラックホールだったからだ。まず、基課題の分析から示

唆していたことは、文書隠蔽工作の初期段階で重要な役割を演じたのが、南アジアのスリランカに派遣されていた植民地官僚だったということである。しかし、マイナーな植民地で起草された政策が、本国イギリスの主導なくして帝国全体にまで拡大するとは考えにくい。特に、ロンドンから世界各地の植民地政策を統括した植民地省は、どのような役割を演じたのか？この問いに対する解答を追求することが、本課題の目的となった。

3. 研究の方法

本課題では、イギリス帝国による文書隠蔽工作を検討するために、研究代表者がイギリスに渡航し、ロンドン大学政治経済学院（LSE）国際関係史学部に拠点を置いて調査を行った。主な手順は以下の通りである。

（1）まず渡航前には、研究代表者がそれまでに収集した一次史料を整理し、さらに最新の研究状況についても整理をすることで、渡航してからの作業を円滑に進めるための準備を固めた。

（2）その上で、イギリスに渡航してからは次の手順で作業を行った。一番の柱となった作業は、本課題にとっての最重要史料、移送文書群の調査である。移送文書群は、約2万ファイル存在し、イギリス国立公文書館に所蔵されている。分量が膨大すぎるのが難点だが、本課題では、ロンドン大学の研究者はじめイギリス国立公文書館での作業に精通した専門家と意見交換を重ねることで、分析の核となる史料を効果的に絞り込むことが出来た。移送文書群のファイルには様々なものがあるが、中でも文書隠蔽工作に関する意思決定と実行の過程を記録したファイルには一定の特徴がある。この特徴を見極めることが、絞り込み作業を進める上での鍵となった。また、この作業を通じて、移送文書群に関心を持つ世界各地の研究者らとのネットワークを広げることが出来た。これは後述するように、国際会議の開催や出版に向けた重要な布石となった。

（3）こうしてイギリス国立公文書館に所蔵されている移送文書群（FCO 141）の絞り込みと詳細な検討を進めつつ、それと並行して植民地省の本シリーズ（CO）との照合にも足を踏み入れた。この作業においては、（目録には存在しながら）いまだに非公開にされている史料があることも珍しくなく、作業は難航した。しかし、こうした非公開史料についても粘り強く情報公開請求を行うことで事態の打開を図った。情報公開請求が成功することは多くはないものの、時には史料が公開され、その中に文書隠蔽工作に関する重要な情報が含まれていることもあった。こうした地道な作業を通じて、東南アジアの植民地の重要性が明らかになった。

（4）さらに、文書隠蔽工作の重要な転換点となったいくつかの旧植民地でも現地調査を行い、イギリスに所蔵されている史料と照合した。特にイスラエル国立公文書館では、パレスチナにおける文書隠蔽工作についての重要な手掛かりが発見された。さらにシンガポール国立公文書館でも調査を行い、情報公開請求をし、可能な限り深掘りを進めた。

こうして充実した調査を行うことが本課題であったが、その道のりは当初から順風満帆だったわけではない。特に新型コロナウイルスの影響は深刻だった。感染症の拡大に起因する様々な状況の変化によって、海外調査は延期が重なった。渡航期間についても、当初の希望よりも短縮せざるを得なくなった。また、イギリスの事情で本課題中には移送文書群が突然非公開にされる

という問題も発生した。しかし、本務校と受入機関の関係者に支えられ、一連の研究を通じて交流を深めた国内外の研究者との研究ネットワークを活用し、その時々状況に応じて可能な作業に注力することで、時には当初予定していなかった経路を辿りながらも、本研究を推進することが出来た。

4. 研究成果

(1) まず実証的な分析結果について。本課題の中心的な問いは次の通り：イギリス帝国による世界的な文書隠蔽工作において、本国イギリスの植民地省はどのような役割を演じたのか？本課題の調査が示すところでは、特に1950年代以降は、植民地省が主導的な役割を演じるようになった可能性が高い。

特に鍵となったのは、マレーシア・シンガポールの独立過程における各植民地政府とロンドンの植民地省の交渉である。ただし、この過程の詳細については、同じ史料を読んでいる研究者らの中でも見解が異なる部分がある。同じ史料からこれほど解釈の幅が生まれるということは、本課題を構想した当初には想定していなかったことであるが、これこそが緻密な実証研究の醍醐味とも言えよう。現在、各地域の研究者と本格的な議論を重ねているところである。

また、植民地省が主導的な役割を演じるようになってからも、文書隠蔽の実行過程においては、依然として現地に派遣された植民地官僚によって状況に応じた対応がなされることが多かった。全体として、イギリス帝国の隠蔽工作には、上から概括的な指示が出されたというトップダウンな側面と、各地域の現場判断で実行されたという脱中心的な側面の二面性があったと言える。これは、イギリス帝国全体の一般的な特徴でもあり同時に、当事者に「言わずもがな」の共通認識、ある種の歴史認識があったことのあらわれだった可能性もある。

(2) 次に成果発信について。こうした分析結果については、研究の進展に応じて、国内外に向けて成果発信を行ってきた。学会や学術会議での報告、出版だけでなく、一般向けのセミナーで社会に向けた成果還元も行った。さらに今後は、世界各地の専門家を集めて、イギリスの研究者と共同で国際会議を開催することを予定している。この国際会議は、イギリス帝国だけでなく他の近代帝国や近代国家による文書隠蔽、史料の移管についての事例を比較するものである。当初は想定していなかったことだが、すでに海外の有力な大学出版会から出版に向けた打診を受けている。

(3) 学術的意義について。本研究は、実証的かつ地域横断的に、歴史認識や集合的記憶について本格的に検討しようという大きな潮流に貢献する。まず、当時のイギリス帝国全体に広がっていた心性を浮き彫りにする。それは、本国イギリスの植民地省のエリートだけでなく、各帝国に派遣されていた植民地官僚、また時には現地側の協力者にも脱中心的に共有されていた歴史認識、罪の意識、未来に向けた共通認識である。さらに、こうした議論は、他の近代帝国や諸国家による類似の事例との比較に発展する。

(4) 最後に社会的意義について。当初は想定していなかったことだが、一連の研究は、海外のBlack Lives Matter (BLM) 関連の文脈でも言及されている。このテーマに対してグローバ

ルな市民社会がいかに関心を向けているかの証左と言えよう。近現代の国家や民族をたばねている紐帯の一つに集合的記憶があるとすれば、その裏側には集合的忘却がある。自分たちにとって都合の悪い過去から目をそらすことで社会がまとまっていることも珍しくない。こうした集合的忘却は、重要でありながらも把握が難しいことが多いが、この一連の研究が貢献しようという大きな研究潮流は、実証的な知見を社会に対して提示するものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐藤尚平	4. 巻 985
2. 論文標題 破棄された文書に光を当てる：イギリス帝国による植民地文書の隠蔽	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 佐藤尚平
2. 発表標題 脱植民地化と史料の移管・破棄・隠匿：日英両帝国の比較に向けて
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shohei Satop
2. 発表標題 Selective amnesia underpins collective memory: a preliminary comparison of the British and Japanese empires' destruction and concealment of sensitive colonial records across Asia
3. 学会等名 Association for Asian Studies 2022 Annual Conference, Honolulu and Online (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shohei Sato
2. 発表標題 Towards a global comparison of selective amnesia: Britain's colonial cover-up across Asia
3. 学会等名 The 11th International Conference of Asia Scholars (ICAS 11) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 鈴木董、近藤二郎、赤堀雅幸（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 826
3. 書名 中東・オリエント文化事典	

1. 著者名 木畑洋一・中根聡(責任編集)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 302
3. 書名 岩波講座 世界歴史 22 冷戦と脱植民地化 I 二〇世紀後半	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	アルバンディ ロハム (Alvandi Roham)	ロンドン大学政治経済学院(LSE)・国際関係史学部・Associate Professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

イギリス	ロンドン大学政治経済学院 (LSE)			
------	-----------------------	--	--	--